とあるISの日本代表

吉良飛鳥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミリオタで中卒で航空自衛隊に入隊した久城ホマレが。ひょんなことで日本代表になるが、基礎学力が低すぎると言う理由でＩＳ学園に入学決定！

更新は遅いですけど見てやってください

目　次

第一話　日本代表ＩＳ学園入学決定！　1
第二話　士官学校主席でも中卒で一浪したからが理由で基礎学力が低いだと　3

第一話　日本代表ＩＳ学園入学決定！

私こと久城ホマレは驚愕のあまり頭での情報処理が間に合っておりません。え？何がどうなってるか説明しろって？わかりました。

まず、私は高校受験が面倒という理由とミリオタが過ぎて航空自衛隊に入隊。本当は戦闘機に乗りたかったけど女性ということでＩＳメインの訓練になりました。これが、男女差別なのか…え？違う？まぁ、一応訓練で戦闘機にも片手で数えられる位は乗りましたよ…あくまで片手だけど…それはさておき、ある日行われたＩＳの適正検査でＳランクを出してしまった分けですよ。ちなみに第一回モンドグロッソで優勝したブリュンヒルデこと織斑千冬がＳランクなのでその人並であることに我ながらおぞましかったです…その数日後、自分の所属するＩＳ小隊の隊長である榊香三佐に呼び出しを受けたのである。

「ＩＳの日本代表になるように政府から通達が来たのだが…」

と言いにくそうに言った

彼女は私が戦闘機乗りになりたかったのを知っている為、言いにくいのだろう。本当にいい人だ。

ん?待って?ＩＳの日本代表!?

ここで一番最初のところに行きます。

でも考えたところでしょうがない、政府の決定に従うのが自衛隊と悟り、

「わかりました。政府の決定に従います」

と返答した。

その後、とあるＩＳ関係の施設に向かい、現日本代表を打ち負かし、正式に日本代表になったはいい物の……

「基礎学力があまりにも低すぎるためＩＳ学園へ行ってもらうぞ。異論は認めん」

……機密事項云々じゃなくて学力ですか、しょうがないじゃないですか中卒なんだし…

しかも、制服まで用意されてるし断れない

「専用機は追ってＩＳ学園に届ける」

こんなやりとりでＩＳ学園の入学が決まった

第二話　士官学校主席でも中卒で一浪したからが理由で基礎学力が低いだと

「…ってやっぱ理不尽だぁ!!!!」

施設内にある寮の部屋でホマレは叫んだ

実はあの後、航空自衛隊の戦闘機乗りを目指す女性士官学校を入学したのだから基礎学力はそれなりにあるはずだと抗議したのだが、政府からはこう切り替えされた。

「高校を出いないのに基礎学力が高いと言えるのか?ＩＳ学園は代表になるのだから絶対的に通るべきだと言われてしまった。」

前者ならば抗議の仕様があったが後者の理由はもう抗いようがない。ちなみに、ＩＳ乗りで士官学校に通いながら小隊に所属している人は少なくない。ちなみにその一たちは防衛大を無条件で突破でき、また機会があれば戦闘機に乗るのことも出きるので戦闘機乗りを目指すホマレには願ったりかなったりだが、やはり士官学校の中のエリートでないといけないらしい。ホマレは今までの文を見るとアホな子の様に見えるが士官学校の学年主席であるためこの制度を利用している。それで基礎学力がないと言われてしまうのは中卒で一浪しているからだろう。世間の目は冷たい

束さんに頼んでやっぱり戦闘機乗りになってやろうかと思いながらテレビをつけると臨時ニュースが流れていた。内容は

「世界初、男子のＩＳ適正者、織斑一夏」

と書かれていた

「ってＳランクで新日本代表の私はニュースになっとらんのかい!!」

なんかキレるところが違う気がするが、とにかく八つ当たりしたかった。

って、んん？織斑一夏？

「って一夏っちゃん!!なにやっとんじゃい!?」

と叫んでしまった。補足すると一夏とホマレは家が隣通しの幼なじみであり、ホマレの両親はホマレが中学に入った時に海外事業のため海外に向かった際に、戦闘機での空爆テロで他界。これがきっかけで戦闘機乗りを目指した。理由はホマレ曰くＩＳで戦闘機と戦うよりも同じ条件の戦闘機で戦って勝ち、仇をとりたいとのこと。ちなみに中学卒業後は士官学校に入るために猛勉強。周囲には戦闘機乗りになるよりＩＳ乗りになった方がいいと言われたく無いため高校受験が面倒と言っていた（一夏と千冬には本当のことを言った）。

ＩＳ学園教室にて

「み、みなさん。おはようございます。私は山田真耶です。一年間よろしくお願いしますね」

シーン…

「え、えっと…出席番号順で自己紹介お願いしますね」

誰もみんながみんな山田先生を無視している分けではない。それ以上にみんなの視線は唯一の男子織斑一夏に集中しているためだ。当の本人の顔はちょうど後ろの席の為わからないけど、多分死にそうな顔してると思う

「織斑くん、織斑くん」

山田先生の織斑くんコールが聞こえないのか一夏っちゃんはフリーズしたままである。

「一夏っちゃん、自己紹介」

と肩を揺すりながら自己紹介を促す。

「お、おうサンkってホマレ!?」

「む、年上に対して呼び捨て?どうせ私は童顔ですよ、それより自己紹介」

とそっぽ向く。

「お、おぅ：織斑一夏です」

と自己紹介するが、「まだ言うことあるでしょ?」と言いたげな視線が突き刺さってる。そして一夏は一度深呼吸すると

「以上です!」と元気に言い放った。さすがの私も頬杖から顎を落としちゃったよあー舌噛んだ。

そんな中、織斑先生が入ってきて一夏に出席簿を落とした。しかも背表紙から…痛そうってレベルじゃなさそうだな〜と考えていると織斑先生自身の自己紹介が終わったのか、自己紹介しろと視線を送ってきた。

「久城ホマレです。航空自衛隊出身の日本代表です。訳あってみなさんよりも年上ですが気にしないで話しかけていただけると幸です。一年間よろしくお願いしますニッコリ」

ヨシキター! 我ながら完璧な挨拶!!

と自分の自己紹介の感想を脳内で述べていたら全員の自己紹介が終わっていた為全員の自己紹介を聞きそびれた…

そして、一夏に声をかける。

「一夏、大きくなったねぇ」

と一夏を久しぶりに見た弟のように頭を撫でた。

「ちょっ、ホマレ、止めろ」

「イヤだ〜」

と一夏で遊んでいると、「ちょっといいか」と話しかけられ目線をあげると箒睨むように立っていた。

「箒っちゃんじゃないの〜大きくなったねぇ」といいながら頭を撫でようと席を立とうとすると箒の胸が視界に入り思わず注視してしまった。

「所属してた小隊にもこんなに大きい人なんていなかったのにーー」と泣いてしまった。

箒は頬を赤く染めながらもしっかりと一夏を確保しその場を逃げた